
なかのひと

草原猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なかのひと

【Nコード】
N8286N

【作者名】
草原猫

【あらすじ】
シヨートシヨートです。

その日は休日だった。

世間一般の休日とは曜日がちがうが、僕の仕事はシフト制なのである。

とにかくその日、僕はリビングで、妻とともにテレビをぼんやりとながめていた。

とくに、なにか見たい番組があったわけではなかった。ただつけっぱなしにしていただけだった。

番組は、子供むけのもだった。着ぐるみが登場し、一般参加の幼児たちといっしょに遊ぶといった類のものである。

我が家にはまだ子供はいないので、関係ないといえば関係ないが、べつに熱心に見ているわけでもなく、また気分がなごむこともあり、すぐにチャンネルを変えるつもりもなかった。

ふと、ちょっととした思いつきをいつてみたくなった。

「こういう番組ってさ、着ぐるみに声優が声をあててるけど、現場ではどんな感じなんだろうね」

すると、妻はこちらのいつていることがよくわからないというように、可愛らしく小首をかしげた。

「だからさ、ああいう現場にいくような子たちは、当然この番組のファンでしょ？　だったら、テレビで声優があてている声と、現場での着ぐるみのなかのひとの声とのギャップに気づいちゃうこともあるわけさ。まさか、ジェスチャーだけでいっしょに遊んでいるとも思えないし」

「なにをいつているの？」

妻が、くすくすと笑いはじめた。

「なかにひとなど、いませんよ」

こんどは、僕が首をかしげる番だった。

「いや、着ぐるみのなかのひとだよ。そっちこそ、なにをいつてる

の？」

「あなた」

なぜか、きゆうに妻の顔色がかわった。

「もういちどいうわ。なかにひとなどいません。いいわね？」

まったくわけがわからない。彼女はなにがいたいんだ？

「いいわねといわれても。だって、なかにひとがいなかったら、どうやって動いているのさ？」

「それは、ああいう生き物だから」

どさり。ベランダに、なにか重いものが落ちたような音がした。

「おや、なんの音だ？」

「ああ！」

いきなり、妻が僕に飛びついてきた。

「そんな音なんか、どうでもいいでしょ。なかにひとなどいないの。いないんだったら」

「どうでもよくはないだろ」

いいかげんうつとうしくなってきたので、僕はすこし強めにいった。

「泥棒かもしれない。ほら、はなれて」

絶対はなれないと、言葉だけならうれしいことをいう妻を引き剥がし、僕はベランダを見にいこうとした。ところが、いままさに力ーテンをあけようとしたところで、突然、玄関の呼び鈴が鳴った。

「はて、だれだろう？ セールスかな？」

さすがに、来客のほうが優先だろう。そう思い、僕がそちらにむかおうとすると、またしても妻が騒ぎはじめた。

「だめ！ あなた、いっちゃだめ！」

「いっちゃだめって」

玄関から、ドアをたたく音が聞こえてきている。というか、ずいぶん乱暴な叩きかただな、失礼な。

「わたしが見てくるわ。いいわね、あなた。なかにひとなどいないのよ」

またそれか。しつこいなあ。

とりあえず、リビングのソファに腰をおろしていると、玄関から押し問答のような声が聞こえてきた。ちゃんと言いかけますからとか、もう決定したことだとか、なんのことだ？

「おい、どうしたんだ？ お客さんは？」

いいながら玄関に出ると、異様な光景が目にはいった。

白衣に白手袋をつけ、白いマスクのようなものを頭からすっぽりかぶったなにものか 体格から考えて、おそらく男だ が、妻の腕をつかんで、押さえこんでいたのである。

乱暴されているのか？ 僕はとっさに玄関とリビングをつなぐ廊下を走ると、白いやつに体ごとぶつかって突き飛ばし、そのまま妻を抱きしめた。

「だいじょうぶか？」

「逃げて！ あなた、早く」

すっかりおびえきった様子の妻を背中に隠して、僕はいましたが突き飛ばした男と対峙しようとした。瞬間、全身が総毛だった。

相手はひとりではなかった。五人や十人ですらない。玄関の外は、白いやつらで埋めつくされていたのである。

「な、なんだおまえら……うわっ」

叫び声もあげきらないうちに、白いやつらが家になだれこんできた。抵抗しようにも、数がおおすぎる。たちまちのうちに、僕は廊下の床に手足を大の字に押さえつけられ、身動きがとれなくなった。「お願いです、彼にひどいことしないで。わたしが、わたしが身代わりになりますから」

そういつて、白いやつらのひとりに取りすがった妻は、蹴り倒されて、僕とおなじように体を押さえつけられた。

「やめる、妻に手を出すな」

僕は叫んだ。そうして、必死に白いやつらから体を振りほどこうとした。

「はなせ。ちくしょう、おまえら、は、はなさない、ただではす

まさないぞ」

しかし、おとなの男たちが、体重を利用して押さえつけているのである。どうすることもできなかった。

” i a n i o d a n o t i h o n a k a n ”

” n e s a m i o d a n o t i h o n a k a n ”

白いやつらが、口々に、どこの国の言葉かもわからない呪文のようなものをつぶやきはじめた。頭がおかしくなりそうだった。悪夢でも見ているのだろうか。思わず僕は身震いした。

「きゃあああっ！」

悲鳴だった。あわててそちらのほうを見ると、妻が腕になにか注射のようなものをされているのが見えた。

「おまえらあ！」

激しい怒りに、僕はかつてないほどの力を全身にみなぎらせた。そうしてめちやくちやに暴れると、なんとか白いやつらのうち、両腕を押さえつけていたやつらを振りほどくことに成功した。

下半身にとりついたやつらを引きずるようにしながら、僕は上半身の力だけで這うようにして、すこしでも妻に近づこうとあがいた。あとすこし、あとすこしで手がとどく。白いやつらから、愛する彼女を守ってやれる。

だが、そこに、さらに数人がのしかかってきた。

「ぐっ……。はなせ！ はなせえ」

持てる全ての力をふりしぼって、僕は妻に手をのばそうとした。

その腕も、白いやつの一ひりにつかまれた。

さきほど、妻に注射を打ったやつだった。そいつは、こちらが動けないと見てとるや、あたらしい注射器をポケットから取りだして、僕の腕に突きたてた。

ちくりとした痛みとともに、血管に薬液を注入された。すぐに、頭が朦朧となりはじめた。世界から、急速に現実感がうしなわれていく。

意識をてばなす寸前、最後に僕が見たものは、くちびるのはしか

ら唾液をたらし、あられもなく恍惚の表情をつかべる妻の姿だった。

(後書き)

なかのひとなどいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8286n/>

なかのひと

2011年3月14日03時25分発行